

子どもたちの未来を創る小児外科



第61回 日本小児外科学会学術集会
会長

田尻 達郎

九州大学大学院医学研究院
小児外科学分野 教授

「真のQOL向上」を目指す子どものための外科医療

先ごろ、61回目となる学術集会を福岡市内で開催した「日本小児外科学会」。「真のQOL（生活の質）向上を目指して」をテーマに掲げ、小児期だけでなく、治療を施した子どもの将来まで見据えた治療の重要性について、意見交換や最新知見の共有を図ったという。学会の手応えや、小児外科の専門医が担う役割などについて、九州大学大学院小児外科学分野教授であり、今回の学会長を務めた田尻達郎氏に話を聞いた。

profile

(たじり・たつろう)氏
1988年九州大学医学部医学科卒業/1995年 医学博士(九州大学)取得/日本小児外科学会認定 小児外科専門医/日本外科学会認定 外科専門医/2019~2021年 日本小児外科学会理事/2020年~日本外科学会 理事/2014~2018年 日本小児血液・がん学会 理事/2023年~JCCG 副理事長/2016~2023年 固形腫瘍分科会委員長/2016~2023年 神経腫瘍委員会委員長/2020年~太平洋小児外科学会 理事

第61回日本小児外科学会学術集会

The 61st Annual Congress of the Japanese Society of Pediatric Surgeons

「学会で、どのような手応えが得られましたか。」
今回は、日本小児外科学会会員、医学生・初期研修医以外にメデイカルスタッフの方々や海外からの参加者を含めて約1,200人が参加し、「真のQOL向上を目指して」のテーマに相応しい忌憚のない意見交換が行われました。

「現地+Web配信」の学術集会
— 感覚でウェブ配信のみ行っていました。ところが、現地開催が可能になってもWeb配信を希望する声が出ていたため、今回は現地とWeb配信とのハイブリッド形式で開催。約1,200人の参加者のうち、200人ほどはWeb参加です。多忙な医師などでも参加できることから、「現地+Web配信」形式は、学会の新しい開催スタイルになり得るのではないかと考えています。



「真のQOL向上」とは、具体的にどのようなことですか。
子どもの命を救うことだけを目標にしているも、患者ニーズに100%応えていることにはなりません。

「真のQOL向上」の実践となる
— 手術を受けた子どもが学校に通うようになり、やがて社会に出てからも排便コントロールに悩むことが無いよう、通常の肛門と同様周囲に筋肉がある場所に肛門を作ることが重要なのです。

「内視鏡手術」だけが、必ずしも「低侵襲治療」とは限らない
— 低侵襲(肉体的ダメージが少ない)な治療として「内視鏡手術」が増えつつありますが、小児外科ではどうでしょうか。

「働き方改革」とも重複しますが、小児外科の医療体制は、今後どのように進化すべきですか。
現在、国内には学会認定の小児外科専門医が765人いますが、本当に効率良く機能しているかは疑問です。それほど難治性でない疾患は、ほとんどの地方病院で治療できるようにして、難度の高い手術や診断が難しい疾患は、小児外科の講座を持ち、若手専門医育成に力を入れて、大学病院や子どもの医療に特化した小児外科医療の「集約化と均等化」を同時に進めることが重要だと考えています。

「現地+Web配信」の学術集会
— 学会で、どのような手応えが得られましたか。

「小児科医の心」を持った
外科の専門医が、小児外科の医師
— 一般的に「小児科」と「小児外科」との違いを教えてください。

「低侵襲(肉体的ダメージが少ない)な治療として「内視鏡手術」が増えつつありますが、小児外科ではどうでしょうか。
— 子どもの外科手術においても、低侵襲であることは重要であり、現在、内視鏡手術は多く行われています。ただ、限られたスペース内で治療を行う内視鏡手術は、隣接する臓器を傷つけたりといったトラブルが発生しているのも事実です。

「働き方改革」とも重複しますが、小児外科の医療体制は、今後どのように進化すべきですか。
— 感覚でウェブ配信のみ行っていました。ところが、現地開催が可能になってもWeb配信を希望する声が出ていたため、今回は現地とWeb配信とのハイブリッド形式で開催。約1,200人の参加者のうち、200人ほどはWeb参加です。多忙な医師などでも参加できることから、「現地+Web配信」形式は、学会の新しい開催スタイルになり得るのではないかと考えています。